

第2学年B組 社会科学習指導案

指導者 前田 大和（教諭：T1）

小安 亜季（栄養教諭:T2）

1 単元名 地産地消の重要性を考えよう ～関東地方の各地に広がる農業地域～

2 単元の設定理由

現代の日本は食糧自給率が低下傾向にあるため、生産量の拡大を目指して、各地域や県、町で地産地消を目指した動きが多く見られる。しかし、嶺南学区には、農家を経営していたり畑で野菜を栽培していたりする家庭が多いため、生徒たちは当たり前のように地元で作った物を食べており、日本全体の中で自分たちが独自の立場にあることに気付いていない。そのため「地産地消」という意味は知っているが、その重要性について理解は低い。そこで、嶺南地区において地産地消を推奨している背景を知る必要があると考える。

社会科で地産地消の重要性を学ばせるにあたり、日々生徒たちに関わりがある給食に着目した。嶺南中学校の給食には地元で採れた新鮮な野菜が多く使われていることから、嶺南学区の特色と結びつきやすい「関東地方の各地に広がる農業地域」を単元に設定した。嶺南中へ給食を提供している丸山学校給食センターでは、使用している農産物の市内産の割合は約30%、市内産を含めた県内産は約49%であり、地場産物を活用した給食を実施している。地場産物の活用は、生徒へ地域の産業や文化に関心を持たせたり、地域において農業等へ従事している方々に対する感謝の気持ちを抱かせたりするなどの教育的効果がある。また、輸入食材の安全性の問題や国内の輸送による二酸化炭素排出の問題など、発展的に現代の社会の諸問題を考えるきっかけにもなる。

本校では、栄養教諭が校内の掲示物や献立表を使い、地場産物について知らせているが、地元産の食材に関心を持ち残さず食べようとしたり生産者の思いを考えたりするようなどころまで生徒の意識は育っていない。そこで、社会科の授業の中で栄養教諭とティームティーチングで授業を行うことは、「地場産業」を農業という視点からとらえるだけでなく、食育という観点から見ても有効であると考えた。授業を通し「地産地消」についての多角的な理解を深めさせたい。

3 生徒の実態（2年B組 男子18名 女子13名 計31名）

本単元を実施するにあたり、以下のアンケートを行った。

地産地消に関するアンケート

・家で米や野菜を作っていますか？（何を作っているかも記入）

はい（26人） いいえ（5人）

・普段家で手伝っていることはありますか？（農作業）

はい（9人） いいえ（22人）

・野菜などを買うとき何を一番気にしますか？または、家の人は何を気にしていますか

値段（15人） 大きさ（9人） 品質（5人） 国産（2人）

・嶺南中学校の給食は好きですか？

はい（28人） いいえ（3人）

- ・嶺南中の給食で良いところはなんですか？
おいしい（18人） 温かい（8人） 米がおいしい（4人） 安全（1人）
- ・将来、農業に携わってみようと思いますか？
はい（3人） いいえ（28人）
- ・地元で採れた物を地元とで消費することを何と呼びますか？
地産地消（23人） 自給自足（3人） わからない（6人）
- ・地産地消は重要だと思いますか？
はい（26人） いいえ（0人） わからない（5人）
- ・地産地消はなぜ重要だと思いますか？（自由記述）
わからない（21人） 食糧自給率を上げるため（7人） 農家を助けるため（2人）
町や市のため（1人）

4 指導観

①栄養教諭との TT により、給食における地元の野菜使用の状況を知る。

現代においては、食糧自給率の低下は著しい。その現状を打開するための一つの方策として、県や市、町が「地産地消」を推進していることを知り、さらに嶺南中学校の給食と結びつけることで、より身近な問題として捉えることをねらいとする。アンケート結果から、ほとんどの生徒は、地産地消という言葉を知っており、重要であるという認識は持っている。しかし、その具体的な内容について答えられた生徒は少なかった。

関東地区は、農作物の生産高は高く、全国上位に位置する野菜も多い。安房地域においても温暖な気候を利用し、様々な野菜が生産されている。なぜ地元の野菜を給食で使うのか理由を追究することで、地場産物の良さに気づくことができる。授業の中で、栄養教諭を TT に迎え、地元の野菜を利用する利点や、食材を卸している生産者の声を届けることで、地産地消の重要性を理解させていきたい。

②課題を明確にして思考を深める。

日本の農業の特色として、事前に地産地消の意味を学習している。本時では、地産地消の例として給食の食材を題材にし、地元の野菜を使用することの利点についてグループで話し合う場を設定する。さらに各グループから出た意見の共有化を図り、資料を活用し自分で調べる場を設定したり、栄養教諭からも助言をもらうことで思考を深めていく。農作物生産者、給食提供者、そして消費者という様々な立場を知り、これからの農業のあり方や消費者としてできることを考えさせていきたい。

5 単元の指導計画（本時4／6）

①関東地方をながめて I	1	○関東地方の位置と自然環境を大観し、構成する都県の位置と名称を理解させる。 ○関東地方の地勢図から、主な自然地名や各都県、主な都市の位置と名称を読み取らせる。
②関東地方をながめて II	1	○首都のもつ中枢管理機能によって、東京は日本の政治・経済・文化の中心地となっていることを理解させる。 ○鉄道のターミナルに副都心が発達し、土地の効率的な利用のために高層ビルが立ち並ぶことについて考え、表現させる。
③さまざまな地域と結びつく人々のくらし I	1	○東京を中心とした大都市圏の拡大によって、過密にともなう課題が発生し、都心の機能が移転したことを理解させる。 ○東京への通勤・通学圏の拡大の理由について、鉄道網の発達と関連づけて考え、表現させる。

④さまざまな地域と結びつく人々の暮らしⅡ	1	○関東地方は日本最大の工業の発達した地方であり、東京湾岸地域から内陸地域へと拡大してきたことを理解させる。 ○工業地域の拡大の理由を、用地や労働力、交通網の発達と関連づけて考え、表現させる。
⑤さまざまな地域と結びつく人々の暮らしⅢ	1	○地場産物の特色を調べ地産地消の重要性を理解させる。 ○地域の農業生産物から関東地方の農業生産物の特色を捉えさせる。
⑥さまざまな地域と結びつく人々の暮らしⅣ	1	○成田国際空港や横浜港は世界の多くの国々と結びついており、関東地方は外国との窓口としての機能をもつことを理解させる。 ○世界との結びつきが強まることで、地域の国際化が進み、外国人労働者が増加したことなどについて考え、表現させる。

5 本時の指導

(1) 本時の目標

地域の農業生産の特色を調べ、地産地消の良さについて自分の考えをまとめることができる。

(3) 評価基準

社会的事象への思考・判断・表現
地産地消の良さについて、生産者の思いや給食を作っている人の思いに触れて自分の考えをまとめることができる。

(2) 本時の展開

過定 (時配)	学習内容と活動	教諭(資料) ・指導上の留意点 ☆評価	栄養教諭 ・指導上の留意点
導入 (2)	1 日本の農業の特色を振り返らせる。	・食糧自給率や地産地消というワードを思い出させる。	
(3)	2 嶺南中学校の給食献立表から地元で採れた野菜とそうでない野菜の写真を見せ当てさせる。	・献立の中の一つの野菜を選び、地元で採れた野菜と地元以外で採れた野菜を用意し価格の比較をさせる。	・献立の写真を見せ、日々の給食で使われている野菜を紹介する。
展開	なぜ嶺南中学校の給食には地元の野菜がたくさん使われるのか考えてみよう		
(5)	3 グループに分かれ給食に地元の野菜が使われている理由を考える。 ・安いから ・おいしいから ・新鮮だから 等	・グループごとに KJ カードに記入させる。	

(5)	4 グループごとに KJ カードを掲示し意見を共有する。	・お互いの意見の良さに気づかせる。	
(12)	5 地元の野菜を使う利点があるか掲示してある資料から調べる。		・それぞれのグループが違った視点で情報を読み取るようアドバイスする。
(8)	6 班でまとめ調べたことを改めて発表する	・新しい情報を KJ カードに記入させ黒板に貼る。	
(10)	7 栄養教諭から地元の野菜を使う理由を聞く。 地産地消のメリット ○生産者との結びつき ・安心 ・地域の活性化（消費拡大・産業発達） ○食料自給率の向上 ○環境保全 ・洪水調節 ・大気の浄化 ・景観形成 ○エコ ・フードマイレージ（移動重量×移動距離） ○旬と食文化の理解 ○安価	・栄養教諭の話聞きわかったことをワークシートに記入できているか、机間指導をする。 ・食糧自給率と環境保全について補足をする。 ・関東地方のおもな野菜生産量の割合を紹介する。 ・地域と関東地方の農産物の共通点に気づかせる。	・各班の KJ カードを分類しながら、地産地消の利点について説明する。 ・班ごとに書いた KJ カードを使い一つ一つ分類しながら説明を加える。 ・提携農家がどのような思いで、野菜を給食に提供しているか生の声を紹介する。
(5)	8 本時の授業を受けて、地産地消の良さについて自分の考えをワークシートに記入する。	☆生産者の思いや給食を普段作っている人の思いに触れ、授業の前の自分より後の自分が地産地消についてどのような考えに変わったか。 (回収・確認)	・ワークシートにコメントを入れる。 (回収・点検)